

財団法人松江市教育文化振興事業団

埋蔵文化財課年報Ⅱ

平成8年度

1998年3月

財団法人松江市教育文化振興事業団

小無田Ⅱ遺跡

本遺跡は松江市南郊の山代町地内にある低丘陵の北向緩斜面に位置している。現況は畑地である。

この低丘陵地では、これまで、須恵器、土師器、瓦などの破片が採集され、散布地として知られるほか、奈良時代（733年）に勘造された『出雲国風土記』の記載から意宇軍団跡や黒田駅跡、山陰道跡の存在が推定されてきた。昭和58年には島根県教育委員会によって丘陵中央部の発掘調査が実施され、掘立柱建物跡、土壙、溝状遺構などが検出され、丘陵全体に遺構の広がる可能性が指摘された。

今回の調査は、民間の宅地開発計画が契機となって実施したものであり、工事予定区域である丘陵地北辺部を対象とした。

以下、調査の概略を記す。

調査地の南半分（丘陵頂部寄り）は長芋の作付により地山面まで攪乱を受けて、遺構は無かった。

北半分では遺構が比較的良好な状態で残存しており、古代の瓦窯跡をはじめとして、古墳時代の溝状遺構、中世の掘立柱建物跡、土壙墓、近世の道路状遺構、時期不明、用途不明の円形土壙、風倒木痕などが検出された。

古代瓦窯は出土した軒平瓦の瓦当文様と、熨斗（のし）瓦の形態及び規格から、山代郷新造院跡の瓦を焼いていた窯であることがわかった。山代郷新造院（四王寺）跡は今回の調査地北方100m余りの茶臼山南麓に所在し、島根県教育委員会による数次の発掘調査の結果、風土記に記載された新造院として確認されている。

出土した軒平瓦は2種類あり、山代郷南新造院跡の調査成果に基づく分類によると、四王寺0類とⅡ類に当たる。0類は内区に忍冬唐草文、外区に珠文をおき、顎に段をつくるものであり、Ⅱ類は内区に均整唐草文と中心飾りを配し、外区は素文で顎は曲線又は直線状に作るものである。

窯跡は3基あり、いずれも当初登窯として作られるが、2号窯だけは後に平窯に作り変えられている。

1号窯は後世に大部分が削平されて残存全長は4m、燃料を燃やす燃焼室と生瓦を並べて焼く焼成室の床面が残っているだけであった。燃焼室と焼成室は階（かい）と呼ばれる段差によって分けられ、焼成室の床面は緩やかな段差をなし、6段分が残存していた。遺物は主に燃焼室にずり落ちた状態で発見された。平瓦、丸瓦熨斗瓦の他、スサ入りの窯壁塊が出ている。地形と窯の残存状況から見て、半地下式の窯と見られる。

2号窯は当初は登窯として操業していたものであるが、焼成室の段の上に残されていたほとんどまだ粘土に近い生焼瓦の状態からすると、火入れの最中に天井が落ちたので一旦はこの窯を放棄するが、あまり時間をおかずに焼成室の前半を削り込み、さらに石や瓦を粘土で塗り込めて前面に付け足しを行なって平坦面を作り出し、登窯の中に平窯を築いている。焼成室の床には平瓦や丸瓦の破片を敷き、側壁、前壁は平瓦と粘土を積み重ねている。奥壁と煙出しは残っていない。調査範囲における平窯の燃焼室から登窯の煙道残存部までの全長は約6mである。軒平瓦の0類とⅡ類は側壁の瓦積の一部に

使われていた。平窯で焼成した瓦は残っていなかった。

3号窯は燃烧室と焼成室が残存し、残存全長は約4.5mである。焼成室は生瓦を並べて焼くための瓦敷きの段が8段設けられており、最奥部の2段に生焼け状態のまま放置されていた。窯詰めは瓦の側面を上下にし、燃烧室側から見たとき端面が合掌式に見える詰め方をしており、端面を上下に置く通例からすると異色である。燃烧室と焼成室の間の階（かい）は垂直に近く75cmもの段差をもっており、この窯の中では最もよく焼けていた。

今回発見された瓦窯から瓦を供給した山代郷南新造院（四王寺）は733年に勘造された『出雲国風土記』に飯石郡の小領、出雲臣弟山が建てたと記載されている寺である。この出雲臣弟山は746年には出雲国造になっている。この頃741年の詔によって国分寺造営も行われていたはずで、2号窯が平窯に改築された契機も新しい築窯技術の移入に伴うものではないかと思われる。

なお瓦窯跡についての熱残留磁気の測定結果は、1号窯跡が725±10年、2号窯跡が730±10年、3号窯跡が755±10年と出ている。

（瀬古諒子）



2号窯検出状況

米坂古墳群

米坂古墳群は和久羅山から派生する低丘陵の先端部に位置する、約30基の小規模古墳から構成される古墳群である。このたび古墳群の一部について農道建設が予定されたため、平成8年度において農道建設予定地内の古墳7基とその周辺区域について発掘調査を実施した。

調査の結果、墳丘や主体部の残存状況はきわめて悪かったが、古墳はいずれも一辺10m前後を測る方墳で、狭い範囲内に互いに墳裾を接するように高密度に築かれていることが確認された。主体部は3・4・7号墳が土壙で、5号墳は石材の形状・散乱状況から石棺以外の石材を用いた施設であったと推察される。また、3・5号墳は主体部が方墳の辺に対して対角線方向に造られた特異なタイプの古墳であることがわかった。築造時期は周溝や主体部周辺からわずかに出土した遺物から判断して、1・2・7号墳が5世紀後半、5号墳が6世紀初頭、3号墳が6世紀半ばに築かれたものと考えられる。4・6号墳は遺物が出土しなかったため時期は不明である。

古墳群の周辺からは墳丘を持たない埋葬施設も8基（図中A～H）検出した。出土遺物からC・D・Eは6世紀後半の造営と判断されたが、他は副葬遺物が無く時期は不明である。

以上、米坂古墳群は内容が実に豊富であるため、ここでは簡単な概略を記した。詳細は、平成10年度刊行予定の「大井・西尾農道関係遺跡発掘調査報告書」の中に掲載するのでそれを参照されたい。

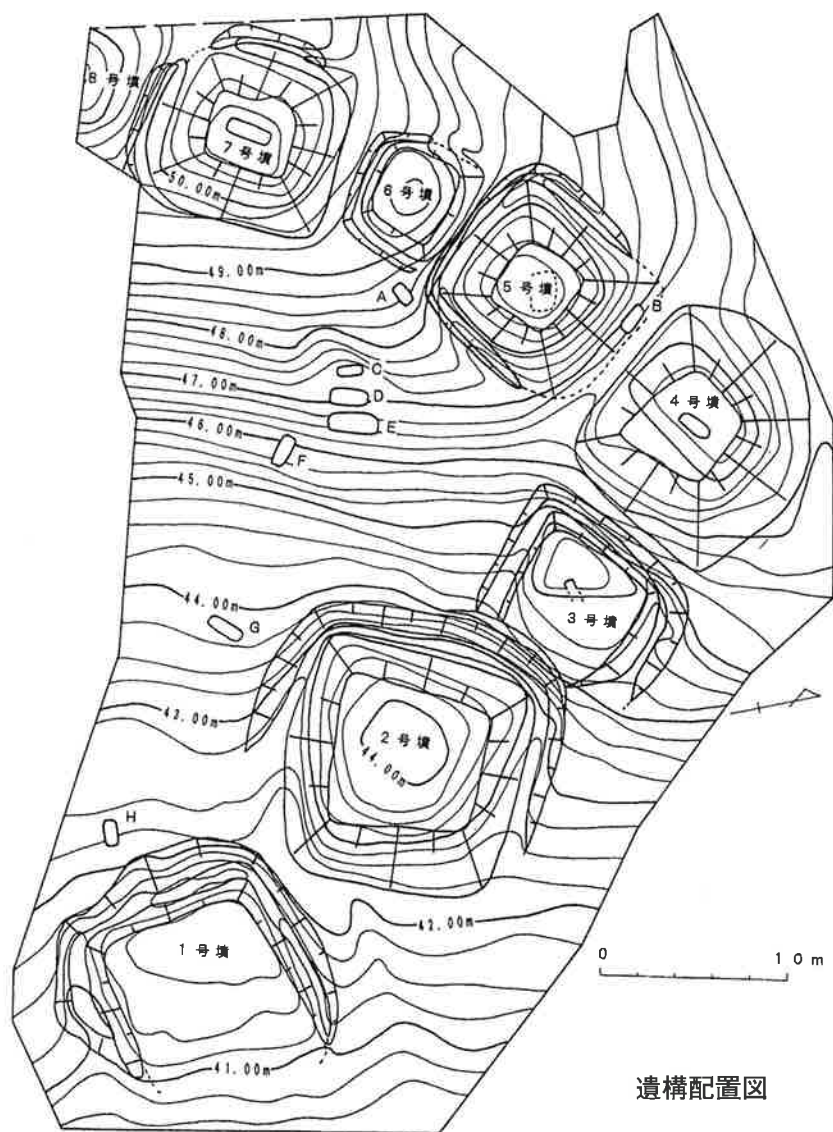
最後に、米坂古墳群の埋葬施設に葬られた人物の社会的立場を考える上で非常に興味深い遺構を検



墳丘検出状況（南西より）

出したので、少々私見を記してみたい。それは埋葬施設Dである。埋葬施設Dは墳丘こそ持たないが、斜面山手側にU字状の周溝が掘られているほか、側面・小口面が石囲いであり、床面には須恵器の蓋坏が敷き詰められた丁寧な造りである。頭部が安置されたと思われる場所からは碧玉製の玉類13点が出土した。ところが、屍床の蓋坏を観察すると、ほとんどが焼成時にひび割れや歪みが生じた個体ばかりで占められていた。この時期においてこれだけの須恵器の不良品を入手することができ、かつ玉類を所持できた人物像を推察すると、6世紀後半から飛躍的に生産量が増加した大井町周辺の須恵器生産に関与していた人物が浮かび上がってくるのである。

(江川幸子)



遺構配置図



埋葬施設C・D・E・F検出状況

柴Ⅲ遺跡

民間の宅地造成に伴い、平成8年5月20日より平成9年2月18日まで現地調査を実施した。

遺跡は国道431号線と同バイパスとの間の低丘陵の南向き及び東向き緩斜面に位置し、本遺跡が存在する同一丘陵の尾根上には以前は山崎古墳と柴古墳群が存在していた。

調査の結果、竪穴式住居跡を3棟、掘立柱建物跡を12棟、柱穴列を3条、等を検出したが、丘陵南側緩斜面では弥生時代後期の円形の竪穴式住居跡を1棟のみ検出し、それ以外の遺構は全て丘陵東側緩斜面で検出した。

まず、弥生時代終末期の2棟の竪穴式住居跡を検出したが、2棟共に平面形は隅丸方形であった。しかしそのうちの1棟の床面から1000点を越える夥しい量の青メノウの剥片と鉄器と思われる小片が出土した。このことより、この住居跡は、完成品及び未成品は出土しなかったが、青メノウのみを玉材とする玉作工房跡と判断でき、松江市内での当該時期のこの種の工房跡の調査例は今回が初例と思われる。また工房跡を1棟しか検出しなかったことより、一般集落の中に工房跡が1棟存在していたと考えられる。

12棟の掘立柱建物跡はすべて側柱造りの建物跡で、総柱造りの建物跡は1棟も検出されなかった。各建物跡の規模・床面積・柱間寸法・柱穴の掘り方の規模や形状・棟方位・伴出遺物などを検討すると、奈良時代後半に1棟、平安時代初頭に6棟、平安時代前半に1棟、の建物跡が存在したと思われるが、4棟については時期は不明であった。また平安時代初頭の2棟の建物跡には柵と思われる柱穴列が3条認められ、この集落の中心的な建物跡と思われる。

出土遺物をみると古くは縄文土器片が出土しているが、出土量としては奈良時代中頃から平安時代前半の須恵器が最も多かった。しかし、平安時代でも10世紀後半の土器は全く出土していないのに、11世紀代の徳利形壺が完形で柱穴内より倒立した状態で出土しており、その頃の建物跡が存在した可能性も否定できない。

調査の結果、この遺跡は弥生時代後期から終末期のごく短期間と奈良時代後期から平安時代中期のかなりの長期間、の二時期に“生活の場”として使用されていたことが判った。そしてこの遺跡の最も華やかな時期は、柵列を持つ2棟の掘立柱建物跡を中心に計6棟の掘立柱建物跡が検出された平安時代初頭の頃と思われる。

また、本遺跡のこのような二時期に亘る利用状況や平安時代初頭の使用様相を踏まえて、今後はこの遺跡が存在する川津地域全域での遺跡の変遷を詳細に分析していくと、川津地域の人々の定着、離散等の“人々の動き”を解明することになるものと思われる。

(昌子 寛光)



玉作工房跡

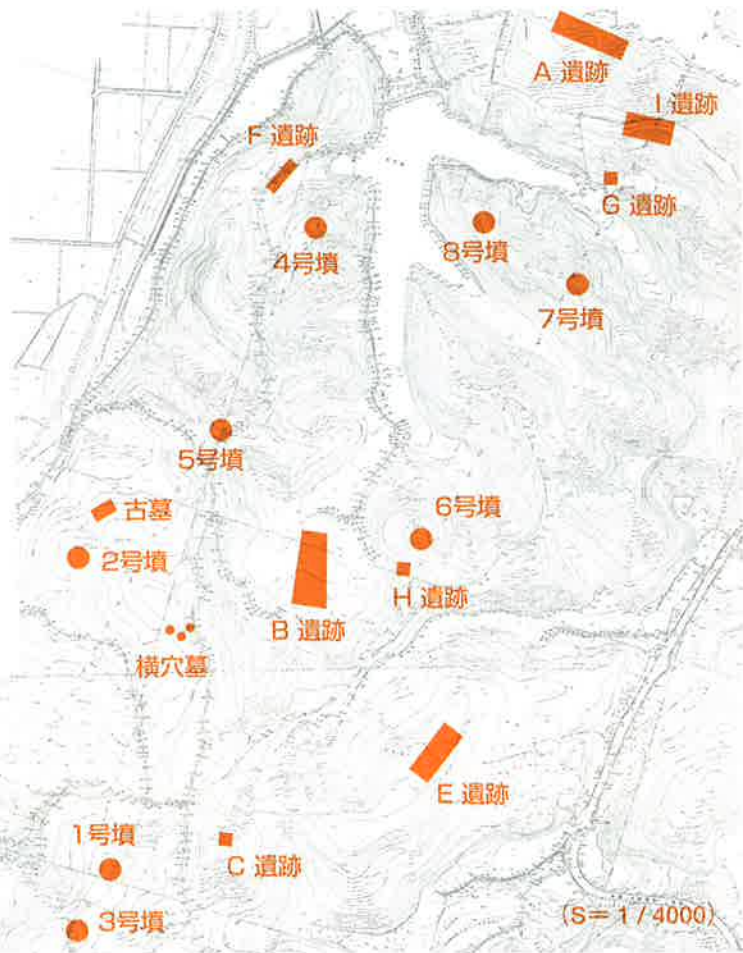


堀立柱建物跡

袋尻遺跡群

袋尻遺跡群は松江市街地南方、平成町（乃白町）及び大庭町にまたがる最高所97mの丘陵上に位置する。本区域内の菅沢谷横穴群は平成5年度に調査が終了している。残る調査区は平成7年度と平成8年度の2カ年にわたって調査を行った。平成8年度は合計17カ所の調査を行い、古墳6基、竪穴式住居跡1棟、掘立柱建物跡1棟、溝状遺構3条、土壇3基、横穴墓3穴、古墓群を確認した。

古墳は6基調査を行った。各々の標高はおよそ50～60mの範囲に位置する。調査を行った2号墳、4号墳、5号墳、6号墳、7号墳、8号墳はいずれの古墳も地山を加工し盛土に使用し



ている。6号墳以外は出土遺物や形態から考えて古墳時代前期頃の築造であると推定される。また、特筆すべき点として4号墳と8号墳から合わせ口の土器棺が検出されたことが挙げられる。両古墳は菅沢池を挟んで東西に位置しており、共に築造時期や土器棺の形態も似通っている。この時期には菅沢池を中心に古墳が築造されていることが窺える。

A遺跡、E遺跡、F遺跡、G遺跡、I遺跡は遺物散布地として調査に入った。このうちA遺跡では掘立柱建物跡が、E遺跡では弥生時代後期頃の竪穴式住居跡が1棟ずつ検出され、溝状遺構はE遺跡で1条、I遺跡で2条検出された。散布地からの出土遺物は弥生時代中期から古墳時代にかけてのものが主であった。

横穴墓は3穴調査を行い、1号穴の石棺の中から人骨が2体、3号穴からは3体分の人骨が出土した。横穴の築造時期は出土遺物等からいずれも6世紀後半頃と考えられる。

古墓群からは土壇が12穴検出され、遺物として五輪塔の各部位が総数138点出土している。これらの古墓は五輪塔の形状や出土遺物から考えて室町時代後期頃のものと考えられる。

本年度調査を行った遺跡のうち4・8号墳、古墓、横穴墓について以下紹介したいと思う。

(曾田辰雄)

[袋尻 4 号墳]

袋尻遺跡群北側、標高43～45mの尾根頂部について調査をおこなった。

調査の結果、主体部と土器棺 2 棺、土壇 2 基を検出し、土器棺については西側を土器棺Ⅰ、東側を土器棺Ⅱと呼称した。

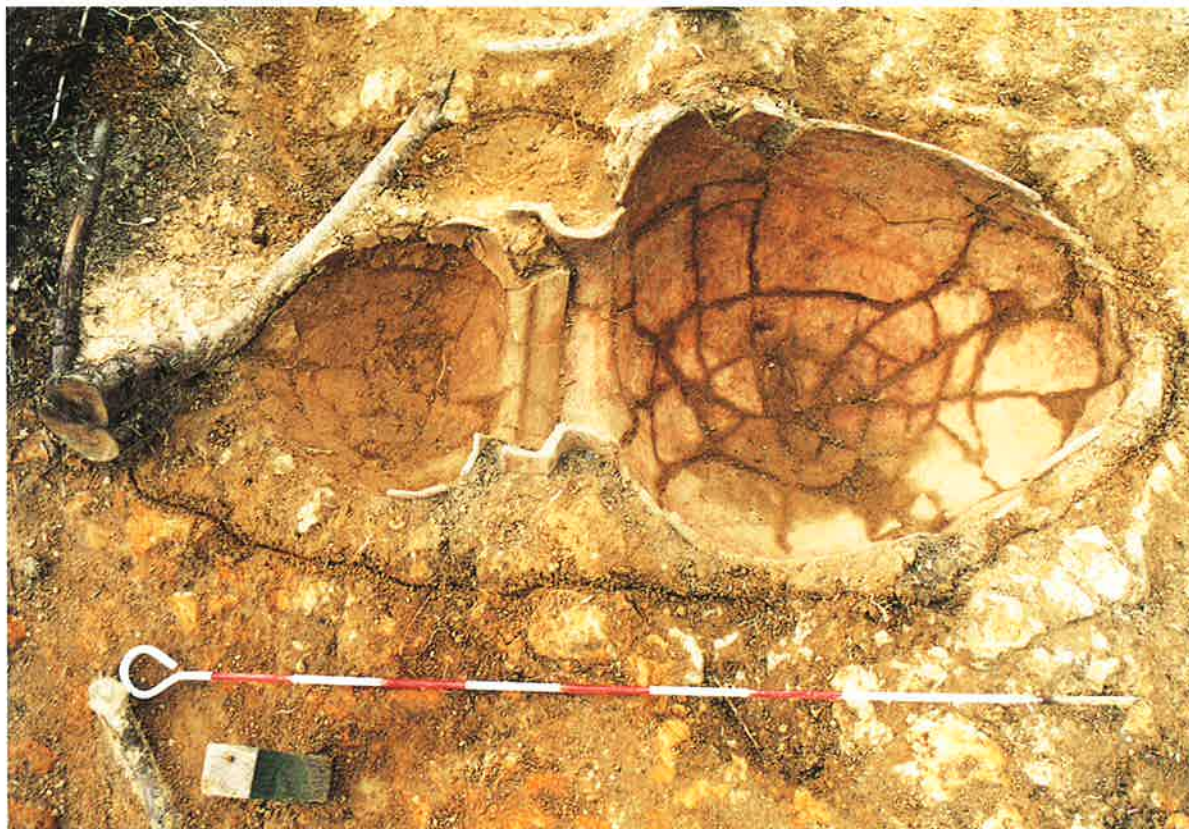
主体部は自然石を使用したものであったが、長年の風雨による墳頂部の流出などにより残存状況が悪く、その詳細は不明なところが多い。

土器棺Ⅰは、主体部の北東側より 2 つの壺が口縁部を合わせる形で検出された。これらの壺は西側の壺で高さ77cm、最大幅56cm、東側の壺で高さ37cm、最大幅35cmを測るものである。前者の西側の壺は頸部に綾杉状の沈線が、口縁部外側には 5 つ連続する竹管文がみられ、口縁部内側には黒色物が塗られている。いずれの壺も古墳時代前期のものと思われる。また、この西側の壺からは、鉄製品が 2 つ出土している。

土器棺Ⅱは、主体部の北東側の緩斜面に土器棺Ⅰと同様、2 つの古墳時代前期の壺が口縁部を合わせる形で検出された。西側の壺は高さ45cm、最大幅36cmを測り、東側の壺は残存状況が悪い為、高さ、幅共に不明であった。

土壇は、主体部の東側より 2 基検出した。これらの土壇からはいずれも炭化物が検出されている。

墳丘については、周溝、墳裾ともに確認できなかった為、明確なことはわからないが、墳頂部の形容などから推察すると方墳であった可能性も考えられる。 (落合昭久)



土器棺検出状況

[袋尻 8 号墳]

袋尻 8 号墳は遺跡群のやや北側、標高40～41mの尾根筋上に位置する。上端径 6 m、下端径14mの円墳と考えられる。主体部は隅丸方形で、長さ約257cm、幅約90cm、深さ約40cm、地山から切り込まれていた。主体部の床面直上からは約 6 cm前後の厚さでほぼ均一に灰色粘質土が検出されたことから、粘土を床に敷いていたと思われる。しかし主体部から副葬品は出土せず、そのほか周溝などの外部施設も検出されなかった。

墳丘から甕形の大型土器がおおよそ主体部を中心に両側の 2 カ所から出土した（1号土器、2・3号土器）。1号土器は主体部の北西側から単独で横倒しの状態で出土した。頸部に突帯がついているが全体に摩滅が激しいためそれ以外の詳細は不明である。2・3号土器は主体部の南東側から横倒しで2個体の口縁を合わせた「合口」の状態^{あわせぐち}で出土した。3号土器の口縁部は意識的に打ち欠かされている形跡があり、2号土器に蓋をするような形で出土した。これらの土器は古墳時代前期の特徴を持っている。これらの土器の中からは出土遺物はなく、土器に密着するようにわずかに地山を掘り窪めていたと考えられる。

墳丘の大型土器は「土器棺」もしくは「供献土器」と考えられている⁽¹⁾。松本氏の分類によると、2・3号土器は横倒しであることや口縁部に蓋をしていることなどから「土器棺」として使用したと考えられるが、1号土器は横倒しではあるが口縁部に蓋がないことからどちらであるかは不明である。

(石川 崇)

(1) 松本岩雄「墳丘出土の大型土器」『山陰考古学の諸問題』1986年



袋尻11号墳出土の大型土器（2・3号土器）

[袋尻古墓群]

袋尻古墓は遺跡群の南西側に位置し、丘陵頂上部と中腹に平坦地がある。

遺構は円形と隅丸方形の土壇が12穴検出され、覆土層から土師質土器（かわらけ）が出土した土壇もあったが副葬品は出土しなかった。これは墓壇として使用されたものと思われる。丘陵の斜面からは小規模な横穴が2穴検出された。これは「窟墓」のような埋葬に関わる施設と考えられる。丘陵中腹に9体の五輪塔の地輪と土台が安置されているのが確認され、その土台を安定させるための基壇状遺構も見られる。

五輪塔の各部分の総数は138点出土し（空風輪32点・火輪18点・水輪33点・地輪35点・土台13点・不明7点）、おそらく30基以上の五輪塔があったと推測される。土師質土器はそのほとんどが軟質で柔らかく形状が判断できるものは数点にすぎず、ほとんどが摩滅した破片であった。形状はほとんどが小型で底部が広く器高の低い皿型で底部には回転糸切りによる切り離しの痕跡が見られる。また古銭（洪武通寶）が丘陵頂上部の平坦地から五輪塔と一緒に1枚出土した。中腹の平坦地からは陶製の骨壺が出土し、中からは人間の左顎と思われる火葬骨が入っていた。この骨壺は備前風の焼締陶器で暗赤褐色をしている。この古墓は五輪塔の形状や出土遺物から、室町時代から江戸時代のはじめにかけてのものと考えられる。

この古墓は性格の異なる「両墓制」で、丘陵頂上部が「埋墓」で中腹の平坦地が「詣墓」であったと考えられる。

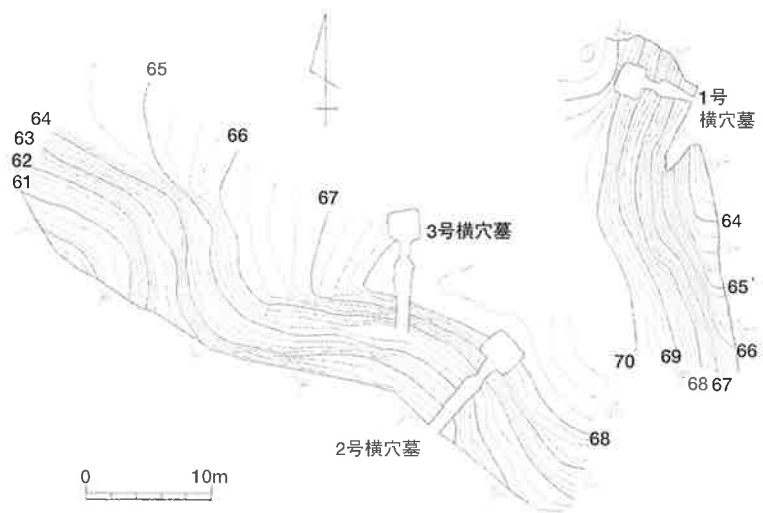
（石川 崇）



袋尻古墓群の中腹の平坦地

[袋尻横穴墓群]

袋尻横穴墓群は本遺跡群中央のやや西側、標高約64.00～66.00mに位置する。本遺跡群内に存在し、平成5年度調査を行った菅沢谷横穴墓の南側に位置する。当初は東側斜面に1穴確認されていたが、調査の結果、同丘陵の南側斜面にも横穴墓が2穴存在し、合計3穴存在することが分かった。そこで、尾根沿いに北側から1号横穴墓、2号横穴墓、3号横穴墓と呼ぶこととした。以下、概略を記す。



袋尻横穴墓遺構配置図

・1号横穴墓

1号横穴墓は標高65～66mの東側斜面に位置する。調査前には墓道部の黒色土が一部露出していた。墓道は残存長約270cm、最大幅約130cmを測り、閉塞部に近づく程広がっている。玄門の長さは約105cm、幅は60～85cm、高さ約90cmを測る。玄室は奥行き210cm、最大幅260cmで天井は床面の四隅から界線が伸び、天井に近づくにつれ薄れ、丸天井になる。最高部で140cmを測る。奥壁に向かって右側には地山を削り出して作った屍床があり、坏の身と蓋が1セット置かれていた。左側には閉塞石と同じ石材で作られた石棺が安置されており、内部には人骨が2体分埋葬されていた。

石棺内に埋葬されていた2体の人骨はいずれも残存状況が比較的良好であった。奥壁に向かって右側を1号人骨、左側を2号人骨とした。埋葬方法は2体の頭部と下肢部を交互に置く対置埋葬で、被葬者は1号人骨は男性、2号人骨は女性と推定される。2号人骨の頭蓋骨の両脇には耳環が、右足首付近には坏身が副葬されていた。また、2号人骨は埋葬後に改めて頭蓋骨を置き直した形跡が認められた。

石棺は蓋石2枚、側石は手前に3枚奥に2枚、床石4枚と小口石2枚の合計13枚で作られていた。長さは内法約170cmを測る。石材は白色凝灰岩で、鑿による丁寧な加工痕が観察できる。

閉塞施設は板状の白色凝灰岩2枚と自然石の凝灰岩で、加工した板状の白色凝灰岩の外側に板を立て、もう1つの凝灰岩で板を挟み込んで閉塞したものと推測される。

遺物は玄室内より坏の他、提瓶が出土し、墓道部からは坏・短頸壺・高坏が出土している。いずれも6世紀後半頃のものと考えられ、横穴墓の構築もほぼ同時期のものと考えられる。(曾田辰雄)



閉塞石ノミ痕拓影 (S=1:3)



石棺蓋石ノミ痕拓影 (S=1:3)



1号横穴墓石棺内人骨出土状況

・2号横穴墓

2号横穴墓は本遺跡群の西側、標高64～65mの南側斜面に位置する。

墓道は、長さ5.5m、最大幅1.4mを測り、閉塞部に向かって右側付近より6世紀頃の須恵器の坏3点、高坏1点、提瓶1点が、またこれより平行する左側から^{はそう}礎が1点出土している。

玄門は長さ1.5mで玄室に近づくにつれ広がっている。なお、高さについては天井部が崩落しているため確認できなかった。

閉塞施設は深さ約15cmの掘り込みがあることや閉塞石がみられないことなどから木板によって簡便に閉塞したものと思われる。

玄室は長方形に近い形状を呈し、最大長は約2.4m、奥壁の幅2.7m、玄門側の3mを測る。天井部は崩落しており確定できないが、おそらく1号墓と同じく低い丸天井タイプと推測される。

玄室に向かって左側には須恵器床が作られており、遺物は6世紀後半頃の提瓶2点、坏1点、短頸壺1点、鉄鏃2点、大刀1点が出土した。玄室右側は須恵器床などはみられなかったが、坏5点、短頸壺1点、耳環2点などが出土したことから、右側にも埋葬されていたものと思われる。また、玄室の壁に不整形な穴が3穴穿たれており、このうちの1穴より10世紀のものと思われる須恵器の坏が出土した。これによりこれらの穴は横穴墓の造営時期より後に穿たれたものだと思われるが、用途、目的は不明である。

この横穴墓は、遺物等の多くの出土や須恵器床の存在が確認されたが、玄室などが崩落をうけており保存状態が非常に悪く、詳細な調査ができなかったことは悔やまれるものである。（落合昭久）



2号横穴墓正面から

・3号横穴墓

3号横穴墓は本遺跡群の西側、標高64～66mの2号墓と同じ南側斜面に位置する。

墓道は、残存長約5m、最大幅1.2mを測り、遺物は須恵器片が数点地山直上から出土している。

玄門は高さ約90cm、長さは1.4mで玄室に近づくにつれ広がっている。遺物は須恵器片が1点出土している。

羨門部の閉塞施設は約30cmの深い掘り込みがあることや、閉塞石がみられないことから2号墓と同じく木板で簡便に閉塞されていたと思われる。

玄室は正方形に近い形状を呈し、左壁の長さ約1.5m、右壁の長さ約2m、残存高1.2m、最大幅は2.1mを測る。天井は奥壁の二隅の界線は天井に近づくにつれ薄れ、玄門側の二隅は界線がみられない。形状はテント形を意識した丸天井のタイプと思われる。

屍床は奥壁側が礫床で、その手前玄室中央部は須恵器床で造られている。

人骨は礫床、須恵器床で1体ずつ（1号人骨、2号人骨）、また2号人骨に脚部が乗るような形で1体（3号人骨）が埋葬されている。なお1号人骨は女性、2号人骨は男性、3号人骨は不明である。これらの1号人骨2号人骨の頭蓋骨は1号横穴墓と同じく置き直された形跡がみられる。

遺物は礫床部で坏4点、提瓶1点、耳環1点、須恵器床部で坏2点、刀子1点、左壁玄門側で坏の身と蓋が1セットと提瓶1点が出土した。なお、耳環は1号人骨の頭蓋骨の左下から出土している。

追葬については人骨が3体埋葬されていること、また屍床に違いや頭蓋骨が置き直されている可能性があることなどから、初葬後に1回以上は玄室の中に入っているものと思われる。

盗掘などをうけておらず、遺物、屍床の遺存状態が良好な上、人骨もほぼ完全な状態で確認されたこの横穴墓は、法医学などの分野においても貴重な資料になりうるものである。（落合昭久）



3号横穴墓玄室内

松江北東部遺跡

島根県松江農林振興センターでは、水田地61.4haを対象として、昭和62年度から10年計画で圃場整備事業を実施しているが、本庄平野一帯が本庄川流域条理制遺跡として周知されていたため、松江市教育委員会では工事の進捗状況にあわせて昭和61年から継続して発掘調査を実施している。本年度は7・10工区について調査を実施した。

[松江北東部遺跡 7 工区]

7工区については、平成6年度に遺跡確認調査を実施した際、出土遺物が多量に検出された地点について、さらに範囲を拡張して遺構の有無、遺物の性格、時代等を明らかにすることを目的として平成8年度に調査を行うことになったものである。

平成6年度調査で遺物が多量に検出された3地点について、2×40mのトレンチを設定し、東から順に佐波第1調査区、佐波第2調査区、原ノ後地区とし、遺物や遺構の検出に応じて拡張する形で調査を行った。以下、地区ごとに概略を記す。

1) 佐波第1調査区

溝状遺構2、掘立柱建物1、小竪穴状遺構、ピット数穴が検出され、古墳時代を中心とした多量の遺物が出土した。

溝状遺構の一つは幅25～35cm、深さ30～35cmで断面は逆台形をなし、3分の2の深さまで拳大～人頭大の礫がぎっしりと埋められ、礫の上には板状のものをかぶせて埋め戻した暗渠状のものであった。東西に走る溝の底面は東に向かって下がっており、検出長は10m程であるが、両側にさらに伸びるものと見られる。時期は基盤層の遺物からみて、中世以降である。

掘立柱建物は2間×2間の総柱の可能性のある建物跡である。この遺構面の覆土は土石流によるもので、遺物は古墳時代前期～後期に限定され、後期の完形に近いものが多くあるので、この時期の鉄砲水によって流失したものであろう。

この建物の北数mの地点では、圃場整備工事中に多量の須恵器、土師器片とともに滑石製の子持勾玉が採集された。調査区の近辺には古墳時代の集落があったものと思われ、この子持勾玉も集落内の祭祀に使われた可能性が想定できる。

2) 佐波第2調査区

遺構は無かったが、古墳時代を中心とする弥生時代から中世までの土器類が多く出土した。

現地付近は度重なる本庄川の氾濫によって土石流と小さい侵食が繰り返されており、礫を含む層の上に粘土層が被り、その上にまた礫を含む層が被るという堆積状況が調査区の壁面でよく観察できた。弥生～中世各時代の遺構が流されて堆積したものであろう。

3) 原ノ後地区

弥生後期後半の竪穴住居 1 棟、古墳時代後期の竪穴住居 2 棟、掘立柱建物 2 棟、ピット多数が検出され、弥生～古墳時代の遺物が数多く出土した。

調査区一帯は原ノ後遺跡として周知された場所であり、以前から須恵器、土師器等が多く表面採集されることで知られていたが、今回の調査で耕作土下には集落の痕跡が遺構として残っていることが判明した。

以上、調査結果の概略を記してきたが、本庄川流域のこの扇状地一帯は、一見フラットな地形に見えるが、地下の荒れ方が激しく、各調査区によって状況が違うので全体像がつかみにくい。報告書作成にあたっては地質学関係者と共同してこれまでの発掘成果を古地形図に落として行く形で古環境の復原を図って行くことが重要であると思われる。

(瀬古諒子)



子持勾玉



原ノ後地区遺構検出状況

[松江北東部遺跡10工区]

10工区は松江北東部遺跡の中で南西部、地形的には扇状地の先端部に位置する。この付近も本庄川の氾濫に伴う土石流の痕跡が各所に見られる所である。10工区では遺構の有無、遺跡の性格の確認などを主な目的として調査を行った。調査の結果、古墳時代から中世にかけての遺物が出土したが、そのほとんどが摩滅した破片のため、土石流によって流れ込んだものではないかと思われる。遺構はほとんど確認されなかったが、調査区の南側から土師質土器（かわらけ）30数枚が一カ所から数枚重ねて並んだ状態で出土し、周辺から小ピットが検出された。

これら土師質土器はすべて上を向けて2～4枚重なった状態で出土した。すべて底部が広く器高が低い皿形で底部には回転糸切りによる切り離し技法の痕跡が見られる。またこの土師質土器の上から鉄製品が交差するように出土したが、詳細は不明である。周辺のピットについては周りの地盤が軟弱であることやピットの規模が小さいことから、住居のような建物よりも一時的な建物が建っていたと考えられる。周辺に墓壙となるような土壙はないことからこの土師質土器は埋葬に使用したのではなく、祭祀に使用しその後に並べて廃棄したと考えられる。土師質土器の形状や付近から出土した白磁片から12～13世紀代の遺構と考えられる。

遺物が調査区の南東側に集中して出土しているのに対して、それより先はほとんど遺物が出土しなかったことから、集落の境界線が南東側にあったと推測される。 (石川 崇)



10工区出土の土師質土器